

# 母の育兒態度について——(一)



——母親の觀た吾が子の理想像——

お茶の水女子大學  
兒童研究室

和 田 豊 子

## 目 次

### 一 研究目的

- 一 研究目的
  - 二 研究方法
  - 三 調査對象
  - 四 調査結果
- (一) 各像の得點
  - (二) 兒童の理想像
  - (三) 母親の理想像
  - (四) 結果の検討
  - (五) 母親と兒童との比較
  - (六) 事 例
- 五 結 び

この研究は現代母親の育兒態度を知るために試みたものである。元來人間行動の特質を表わすものとしては性格又は、人格がとり上げられているが之らと並んで最近の心理學では態度 Attitude がしばしば問題にされている。文化や社會に對する人間の反應はこの態度を介して知ることが出來、特に個人の思想とか情操とかいつた精神活動を研究するためには最も適切な方法であると言われている、そこで私はこの方法を用いて母親たちの子供に對する行動の傾向を探らうと試みたのである。さて、「家庭に於ける教育的因子」としては、

- 一、家庭の生活形態に關するもの。
- 二、子供の身體的養護並びに訓練に屬するもの。
- 三、子供に意識的又は無意識的に働きかける力としての兩親又は保育者の教養態度。

などが考えられているが、この研究でとり上げたのはこの

内の、

(三)に含まれる母親の態度、殊にその背景をなす心理的な面を主としたものである。前に行われた青木誠四郎氏の『児童生育調査』の結果によれば、両親の養育態度には、嚴格、放任、溺愛、神經質、反省的、閑却の六つの類型があると言われているが、氏のものは「躰け」に重點が置かれていた。私は「薰化」といつた内部的因子に主眼をおいたつもりであるが、淺學のために充分その目的を達する事が出来なかつた。

『母親の育児態度』の要因として私は、「母親の兒童觀」「子供への愛情の型」「子供への効果的な期待」「養育原理の存り方」「子供の理想像」「家庭觀」「教育方法」「躰け方」「現在當面している問題」などを取り上げ、これらの諸點を究明することによつて『現代母性』の育児態度を知り、家庭教育が當面している問題を發見したいと念じたものである。

しかし、今回は、前述の諸項目の中の「理想像」だけをとり上げて報告したいと思う。終戦後を契機として私たちの價値評價の態度は大きな動搖を來したが、新しい日本はどんな型の人間をその理想として描くべきなのであろうか。母親たちは愛する吾が子をどの様な人間に育てようとしているのであろうか。又子供達自身は如何に生きようとしているのであろうか。勿論理想像の確立には相當長い時日が必要なのであるが、ともあれこの問題は一人母親だけに限られたもので

はなく私共すべての人間が求め続けねばならない課題ではないであらうか。

理想像以外の諸項目についてはいづれ機會を得て報告することとし今回は割愛することにした。

調査を實施したのは、昭和二十四年九月より十二月に至る四ヶ月間、整理のためには三ヶ月を費した、尙研究に當つては終始牛島義友教授の指導を賜つたことを附け加えておく。

## 二 研究方法

研究は實態調査により行つた。又調査は前述の諸項目を含む質問紙を用いたが今回はその中の「理想像」に關する調査項目についてだけ述べることにする。

理想像についての調査にはさき以後藤岩男氏が兒童に對して實施された方法にならい、十二項目の想定理想像を母親に示してその中から五つの像を品等選擇してもらう方法を用いた。即ち、

『あなたはお子様をどんな子供に育てたいと思いますか、次の例の中から五つを選んで順番をつけて下さい』の如き質問文に加えて十二項目の理想の兒童像を提示した。回答に對してはまづ選擇された理想像に對して一位に五點、二位に四點三位三點、四位二點、五位一點、の如き評點を與え、次に各像の得點を集計整理し、その結果について検討を加えたのである。

整理にあつては種々の分類を試みた。即ち最初は各理想

像を中心として集計し、次いで十二の像を四群に集め、各群について、地域別、家庭の職業別、母親の年令別、等の角度から整理してみた。又兒童自身の評價結果と比較する方法も試みたのである。

### 三 調査対象

調査の対象はこれを、東京、地方中小都市、農漁村に分けて各地域から乳幼児を現有している母親を無選擇に採り回答を求めた。各地域及び回答を得られたものの数は、

東京	山手地區	一五〇	計二九七
	下町地區	一四七	
地方都市	尼ヶ崎市	一〇八	計二五〇
	盛岡市	一四二	
農漁村	磯濱町	九三	計二一三
	豊里村	一二〇	
	合計	七六〇	

であつた。

(註) 磯濱町は茨城県東茨城郡所在の戸數、三、三二六、人口一五、六一八、内漁業世帯八〇八の純漁師町であり、豊里村は京都府何鹿郡に在る世帯數一、〇八〇、人口七、五〇〇、農業世帯九三五の純農村である。

対象家庭の職業分布を%で示すと

	專門的	半專門的	熟練	その他	總員
東京	二〇・〇	六三・六	六・三	一〇・二	二九七人
地方都市	二五・二	五三・六	四・〇	一七・二	二五〇人
農漁村	〇・九	一〇・七	八三・一	五・三	二一三人
計	一六・三	四五・五	二七・〇	一・三	七六〇人

で表によれば東京及地方都市では、半專門的職業家庭が半ば以上を占め、農漁村では、大部分が農漁業であることが知られる。

又対象となつた母親の年令分布は次表の通りである。

地域	年令	員數(人)					無記
		三〇—三九	四〇—四九	五〇—五九	六〇—六九	七〇—七九	
東京		三〇一	一五・〇	五四・一	二七・〇	一・三	二・六
地方都市		二五六	一一・六	四三・〇	三八・〇	六・六	〇・八
農漁村		二一六	四・二	二〇・五	五〇・〇	二三・三	二・〇
總計		七七三	一〇・八	四一・二	三五・六	九・三	三・三

(單位%)

右によると全員の年令比は三〇歳から四九歳のものが七七・九%でその大部分を占め、地域的には都會ほど若年が多くなつてゐる。

又、母親たちの教育程度は

地域	地域別児童数(人)				
	初等%	中等%	高等%	無記%	
東京	三〇〇	二九〇	五〇〇	一七三	
地方都市	二五六	二一八	六三二	一一八	
農漁村	二二六	七四・一	一四・四	一・四	
總員	七七二	三五〇八	四四・四三	一一〇二	六・四八

で東京及地方都市では半ば以上の母親が高女卒、農漁村では大部分が小學校卒、高等教育を受けた母親は全體の約一〇%にすぎな。

(註) The young child in the Home V. S. A. 1929 によれば當時のアメリカ母性の教育程度は

無教 教育年限 % ハイスクール % カレッヂ%  
 育者 一―八年のもの 一―四年までのもの 以上のもの  
 〇・七 三三・七 三七・〇 二八・六  
 であつた。

次に各母親たちの平均所有兒數を記せば、東京山手地區が最も少く、三・〇八名、S・D、一・四一、漁村は最も多く五・四八名、S・D、二・一八、農村は四・六二名、S・D一・五八であつた、しかしこれは母親の年令とも關係深いものであるからこのまゝ兩者を比較することは出来ない。

對象の母親に所屬する子供の總數は二、七二八名であり、その詳細は次表の如くである。

數供子別區地

地域	児童数									
	一	二	三	四	五	六	七	八以上	平均	S・D
山手	八・八	二九・五	二六・八	一七・五	一〇・〇	四・〇	〇・七	〇・七	三・八	二・八
下町	九・九	二五・八	三三・三	一七・五	一六・九	七・五	六・八	五・三	三・九	二・九
尼ヶ崎	二・九	一四・三	二〇・〇	三三・〇	九・〇	九・〇	〇・九	一・七	一・七	二・八
盛岡	〇・六	三三・〇	二五・二	二五・〇	七・七	五・〇	〇・六	〇・〇	二・〇	二・八
農村	四・五	六・九	一九・五	一七・〇	三三・〇	一四・五	八・七	六・九	三・三	二・八
漁村	二・八	五・六	一四・一	九・八	一五・六	二六・九	三・五	三・七	二・八	二・八
總員	八・五	二六・六	三三・五	二〇・〇	二五・三	一四・五	五・五	四・一	三・一	二・八

以上述べた研究對象について考へてみるに對象者の年令構成の點に多少の偏りが見られる、即ち農漁村に於ける對象の年令が他地域より目立つて高いが、これは地域的な比較、年令上の比較等をする場合念頭に止めなければならぬと思ふ。この點で必ずしも思わしい對象でなかつたことを残念に思ふものである。

(つづく)